
至上最弱勇者様!

塚矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

至上最弱勇者様！

【著者名】

塚矢

N4620Z

【あらすじ】

「おはよーゅうゆ」「ひ

そんな風に呼ばれる悠太は高校生！
でも見た目は小学生！

そんな子がいきなり勇者に！？でも戦闘スキルは0
一体これからどうなるの！？

いま、人気の最強物に対抗して最弱もの！

原稿の口述（複数形）

最弱でもいいじゃないか！

改行を少なくしました。

いい朝……

今日も普通にご飯を食べて高校へと向かう途中の通学路。「ゆーうーたーくうーん」

毎日聴かされている猫撫で声が後ろから聞こえてきた。何故、いつもここで会ってしまうのだろうか。

「実夕、その呼び方はやめてよー！」

「えへへー。だつて見た目悠太君つて小学生だもんつ！　この先に大きい犬がいるから私が守つてあげる！」

痛いところを突かれた。悠太の外見を簡単に説明すると、小学生。身長は140ぐらいしかなく、童顔で声も声変わりしているとは思えないほどの幼い声だつた。中々のイケメンであり、小学校でなら告白されてもおかしくない。美青年というよりは美少年だつた。そんな、悠太は高校ではほぼ全員の女子から、「ゆうゆう」とか、「ゆうちゃん」とかと、まるで小学校低学年の子供のようなあだ名でしおつちゅう呼ばれていた。

しかし、悠太はそんなあだ名をあまり気に入つてはいなかつた。

外見は小学生でも心は立派な高校生なのだ。（自称）

「うるさい！　これから伸びるんだ！　それに、犬なんて一人で平氣だもん！」

悠太のしゃべり方も欠点だつた。時々、子供が使うような言葉が混じつてしまつ。

悠太自身はあまり違和感が無いのが悩みどころであつた。

「あうー。そんなに怒らないでよー。ともかく学校いこー！」

渋々、実夕と連れ立つて学校へと歩く。

実夕は女子にしては身長が高く、173cmはあつた。その性格とは裏腹に大人びた顔つきをしているので、小さな悠太と歩いているところを傍から見れば親子といつても疑われないであろう。

長い一本道を歩いていくと見えてくる極普通の高校が、悠太達が通う私立湘南高校だった。

偏差値はそこまで高いわけでもなく低くもない。

何をとっても平凡としか言いようが無い高校だった。

悠太がその高校を選んだのは単に近かったから。

悠太の家からは歩いて20分ほどで着く。

早起きが苦手な悠太にとつてあまり時間がかからずに行けるというのは設備云々以前に最重要のことであった。

実夕と登校し、下駄箱に自分の小さな靴を入れ、クラスへと入る。途端、あちこちから声が上がった。

「ゆうちゃん、おはよ～」

「ゆうゆうおはよ～！」

「おー、ゆうほしちゃまは今日も人気だねー」

上の二つは女子で一番下は男子である。

・・・・・そう、何時かは僕が上から見下ろしてやるー

と、小学校の頃から誓い続けたがいまだ果たせたことは無い。

「だから、その呼び方やめてよお！」

毎日言っているが、効き目はない。むしろ喜んでいる。

「あーん。ゆうゆうが怒った～」

などとはしゃいでいる女子はもう華麗にスルーするしかないのだろうか。

学校での時間はすぐに流れむ。

昼休みには女子に囲まれ、あーん、とか言つて食べさせたりしてくるが、華麗に断る。

なんか、僕の扱い酷くない……？

全ての授業が終わり放課後のチャイムがなるとまた囮まれないいうちにさつさと校門を出て行く。

誰にも気づかれないように素早く俊敏に……

今日は、誰にもバレナイ……

はずだった。

「ゆーうーたくさんっ！」

……今日もバレてしまった。

「実夕……何で君はいつも僕につきまとうの？」「

「だつて悠太君だけじゃ心配だもんっ！　この実夕お姉さんに任せなさい！」

「同じ年だよ！！」

いつもこんな単調なやりとりが続く。

毎日、こうやってくる実夕にはうんざりするが、悠太はこの時間が心の奥底では結構好きだった。

実夕とは幼馴染だった。あまり友好的ではない内気な性格だった幼い頃の悠太をオープンな性格にしてくれたのは実夕だった。その点ではとても感謝している。

そのおかげで、高校でも友達も作ることを出来た。

親は悠太には何も教えてくれなかつた。

生まれながらにして小柄だった悠太。

父はバスケの選手、母はマネージャーというバスケ家族だった。

長男の浩一はその恵まれた体格でいまは大学で活躍している。

悠太が生まれたとき、両親は少なからず落ち込んだがこれから大きくなるという希望を捨てなかつた。

しかし、次第に年を重ねるにつれても一向に大きくならない悠太に

注ぐ愛情は日に日に減つていき、両親は浩二を寵愛した。

悠太の内気だつた性格はそんな両親の影響が少なからずあつた。
どこと無く余所余所しい雰囲気で生まれ育つた悠太の唯一心が許せる人物は他でもない実夕だつた。

そんな物思いにふけつていると唐突に話を切り出された。

「そういえば、悠太君って好きな女の子とかいる？」

あまりにも唐突すぎた。

好きな女子かー。

あんまり意識してないからいいかなー

と、答えると、実夕はちょっと嬉しそうに微笑んだ。

悠太にはその笑顔の意味が分からなかつた。

「そつか！良かつたあ

何が良かつたのだろうか？

尋ねてみたが、返答は無かつた - - -

原者の口述（後書き）

誤字脱字、変な表現ありましたらお知らせください！

感想も待っています！

黒丸（前書き）

今回短めです。

翌日。

果たして、昨日の実夕の笑顔はなんだつたのか?という疑問は、朝ごはんの大好物の目玉焼きになより脆くも崩れ去つていつた。

朝ご飯を食べ終えた悠太は自室へと戻り学校に行く準備をしているところだつた。

突然、携帯がブルブルと震えた。

- - - - - 誰からだろう?

携帯のディスプレイには、新着メールが1件表示されていた。

差出人は……実夕?

おかしいな。実夕は自分で言つたほうが伝わる!とか主張してメール機能はほとんど使わないはずなんだが、……
気になりながらも、メッセージを開いてみる。

- - - - - 今日、悠太の家の前で待つてて。迎えにいくから。

そのメールは短かつた。

いつもなら、何も断らずにいつの間にかついてきているのだが、今日に限つてはどうして?

なにはともあれ、学校へと向かう準備が出来た悠太は部屋から出で家の玄関で壁に背をもたれかけていた。

2分程待つていると、前方から実夕が姿を現した。

「ごめん! 待つた!?

「いや、別に。それより、何で今日はわざわざメールを送つてきたの? 自分勝手な実夕がそんな気の利いたことをするはずはないと思つんだけど」

「あー？ 悠太君ひつじゅー！ うえーん、悠太君がこざめるよお

といつて泣きまねをしている実夕に問いかける。

「で、何でわざわざメール送ったの？ 後、その呼び名やめてよね
！」

「んー……悠太君に言いたいことがあるの」

そういうと、実夕は急にさつきまでのおりやうけた雰囲気から眞面目な顔へと変わった。

「あ……あの、ね？ そのお……」

「何だよ、はっきり言つてよー。いつもの実夕らしくないじゃん！
？」

「あ、あの、ね？ わ、私、そのお……悠太君の事が……す……！
！」

実夕が言い終えるか言い終えないかのうちに、実夕の身長が縮んだ。いや、縮んだのではない。地面に引き込まれていく。

「実夕！？」

実夕が立っていた場所には大きな黒い丸があつた。

「実夕！？ 実夕！？」

「ゆ……悠太君、これ、何？」

実夕が恐怖に顔を歪めながら尋ねてきた。

そんな……

考えているうちに実夕の体はどんどん黒い丸の中へと沈んでいく。

「実夕！？」

実夕の腕を掴み引っ張りあげようとするが、びくともしない。

「悠太君……」

もう、涙目に変わってきている。

そんな気弱そうな実夕は今まで見たことが無かつた。

どうする？ 何としても助け出さなければ。

焦りがどんどんと悠太の思考力を奪っていく。

どうする？ ……どうする！？

実夕の体は見えなくなり助けを求めるよと伸ばした手しか見えなくなっている。

くそつ！…！」うなりややけっぱち！

実夕の手を掴み、自分も一緒に黒い穴に飛び込む。

黒い穴は実夕を沈めたよ。」 悠太を静めていた。

悠太の体も飲み込んでしまったとき、実夕と悠太の思考は停止した。

悠太 悠太

また私言ってないよ

悠太の事を好きだった

そして、実夕の思考はまた混沌とした。

——どれぐらい経つたのだろうか？

実夕は気がつくと自分が知らない場所にいた。横には悠太が倒れている。

「悠太！ 悠太！！」

実夕は悠太を抱き起こし、揺さぶる。
しばらくすると、悠太が不快そうに、呻きを上げた。

「ん、 むう……」

「悠太！ 大丈夫！？」

「んみゅう…… 実夕……」

「悠太！？ 気がついたの！？」

「…… お腹いっぱい……」

んなつ！？

……許さない

その後、悠太の頬が真っ赤に腫れたのは別の話だった。

黒丸（後書き）

誤字脱字があれば指摘お願ひします。

此處は何處？（前書き）

ちゅうじがんばって書きました。

此処は何処？

……頬が痛い

「実夕…………？」

「悠太君？」

右頬の痛さで悠太は目が覚めた。視界一杯には実夕の心配そうな顔が広がっていた。

いつも強気な実夕を見ていたけれど、さつきからこんな顔ばかりだ。何か調子が狂つてしまつ。

そして、今自分たちが置かれている状況に気がついてしまつた。

「実夕、此処は何処なの？」

「…………私にも分からぬ」

悠太達が今居る場所は薄暗い、灰色の壁で出来てゐる建物のようだつた。

部屋の隅へは下へ行く階段と上へと続く階段があつた。とにかく、ジツとしていても始まらない。

「実夕、とりあえず外へ出てみない？」

「ん、そうだね」

実夕に承諾された。外へ出るには、常識的に考えれば下へ行つて1階へと辿り着けば出られるはず。

そう思い、足を下へと続く階段へと向かわせる。

階段は、暫く使われていなかつたかのように埃を被つてゐた。

しかし、なんだったのだろうか。

あの、黒い丸の穴は。

いきなり出てきて自分たちの体を飲み込んで行くだなんて尋常じゃない。少なくとも、悠太は見たことが無い。これが、超常現象といふやつだろうか？

実際、悠太も事実を受け入れ切れていはない。

何を確かめるにも「」を出て外の様子を見ないと「」が何処だかすらわからない。

カツカツカツと階段を降りて行く。でも、下へはつかない。

「ねえ、今まで続くのかなこの階段」

「わからない」

降りても降りても下の部屋につかない。

こんなのがりえない。おかしい。

神社の石段ではあるまいし。もう200段以上は降りている。

「ねえ、ここ、何なの？ 何で着かないの？ 悠太君、私、怖いよ

……」

実夕が弱気になる。日は、早く此処から帰りたい！と主張していた。
「実夕、弱気にならないでよ。 いつもの強い実夕でいて。僕を守つてくれるんでしょう？」

実夕を励ます。といつより、奮い立たせる。此処で実夕に弱気になられては敵わない。

「そうだよね……うん！ 私、どうかしてた！！ ようし、私が守つてあげるからね！！ も、あ、気を取り直してドンドン行こう！」

「

そういうて実夕は歩調を速めた。

うん。実夕にはつむじぐらいがけよつじ良いー！！

更に、スピードアップし降りていくうちに悠太はある「」に気づいた。

階段には足跡がすでに残っている。

そして、ある仮定へと辿り着く。

-----僕たちは同じところを歩いているんじゃないかな？-----

もし、本当にそつだとしたらいこのままでは埒が明かなかつた。実夕を呼び止める。

「実夕」

呼びかけて自分の考えを実夕に言つてみた。

「ええ！？ ジやあ、私たちはずっと同じところを歩いていたの！？」

それを聴いた瞬間、実夕の顔を疲労が覆つた。でも、絶対に出口はあるはずだ。

「実夕、これからはただ降りるだけじゃなくていろいろ注意しながら降りよう」

そう提案し、実夕もそれが良いと思つたのか頷いてまた歩き出した。今度は、慎重に。

5・6分経つた頃だろうか。

早速、効果が現れた。

実夕が、突然、

「あつ！」

といつて立ち止まつた。

「実夕、どうしたの？」

「見てよ、これ」

実夕が指差す先には灰色の壁があつた。

「何も無いよ？」

不思議そうに尋ねると、実夕はニヤアツと笑つてこう言つた。

「もつと、よく見てみてよ

顔を近づけてみる。

何か、数字が並んでいた。

でも、よく見えない。ふうと息を吹きかけてみる。途端にブワッ

と埃が舞つた。

「ゲホッゲホッ！」

埃を思い切り吸い込んでしまい咳き込んだ。

「もおー何やつてんのよ」

実夕が呆れたという顔で見てきた。

「ほら、みてここー！」

実夕が指差す先には数字の式が羅列していた。

「+ 1 - 2 3 + 5 - 4 + 2 - 5」

声に出して呼んでみたが意味はさっぱりわからない。実夕も隣でうんと唸つていたが、突然パッと閃いたとうように顔を輝かせた。

「ふつふうん。私つて天才かも！」

「天才はテストで20点を取りません」

「うつ！？ 古傷を突かれた……」

ハアと溜息をつく。

「幸せが逃げるよ？」

「余計なお世話だよ！」

「フフツ、悠太君かーわいいー、まあ、ijiはお姉さんに任せなさい！」

つんつんと頬を突付いてくる。

……本当に大丈夫かな？

実夕は1段上へと上る。

「実夕？ 戻つてどうするの？」

「いいからいいから！ 悠太君も私と同じ動きをして」

言われたとおり1段上へと上る。

その後も実夕は同じような動作を繰り返す。

上がつたかとおもいきや、今度はドンドン下がる。そしてまたちょっと上がつてちょっと下がる。

「実夕、僕をからかつてるの？」

いい加減うんざりした僕は少し苛立つたように言葉を吐き出す。

「そんなことないわよ。これで最後」

そういうて下に下がる。

何が最後なんだか、悠太にはわからなかつた。

実夕の後へ続いて階段の下へと降りていく。そして実夕が止まつた場所で僕も立ち止まる。

……え？

さつきまで見えなかつたものが見えてきた。

「壁が……」

さつきまでこんな穴は無かつた。

どうなつているんだ？

実夕の推理が正しかつたといふことなのか？ 何故か、悔しい気持ちになつてくる。

灰色の壁には黒い丸がぽつかりと空いている。

何処かに続いているんだろうか？

「実夕……どうするの？」

「行くしかないでしょ！！」

実夕は、自分の推理が正しかつたので氣を良くしたのか上機嫌である。

そういうと、実夕は黒穴の中に足を入れる。

「悠太君も早く！！ いくら私でも一人はヤダ。はぐれないように手、繋いでね？」

そういうて実夕が手を差し出す。

僕は、その手を掴み勢い良く黒丸の中へと入つていく。

そしてまた、黒穴に落ちたときのように意識が薄れていつた。

-----「おめでとうございます」

抑揚の無い声が僕の耳へと入ってくる。
目を開けるといつまにか、そこはかつときまでいた場所では無くな
つていた。

此處は何處？（後書き）

誤字脱字があれば指摘お願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4620n/>

至上最弱勇者様!

2010年10月9日12時49分発行